

平成23年度沖縄群島病害虫発生予報第10号(1月予報)

I 1月の気象予報

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	30	30	30
平年並	40	40	40
低い(少ない)	30	30	30

(平成23年12月23日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	17.0	19.5	14.6	107.0	94.2

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 1月の発生予報および防除上の注意事項

1 さとうきび

- 生育初期におけるメイチュウ類の防除対策
 - a 12月中旬～下旬の調査の結果、夏植圃場での芯枯茎率は13.8%であった。
 - b 圃場内外のイネ科雑草は本種の発生源となるため、除去する。
 - c 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選定し施用する。
 - d イネヨトウが多発生している地域では、食入初期の幼虫を対象に防除を徹底する。
 - e 平成23年度病害虫発生予察注意報第2号(平成23年12月28日付)参照。

2 マンゴー

- 炭疽病、軸腐病およびかいよう病の防除対策
 - a 12月下旬の調査の結果、一部の施設で炭疽病の発生がみられた。
 - b 不要な新梢や罹病枝や葉は発生源となるため、ビニール袋に入れるなどして施設外に持ち出し処分する。
 - c 着果後の被害軽減のため、この時期からの予防防除に努める。
 - d 出蕾がみられる園では、花芽に対して薬害の少ない薬剤を選定する。
- ハダニ類の防除対策
 - a 12月下旬の調査の結果、葉当たり雌成虫数は0.1頭未満(前年0.1頭未満、平年0.1頭未満)と平年並であったが、一部圃場で発生が多くみられた。
 - b 多発すると防除が困難になるため、早期発見・早期防除に努める。
 - c 出蕾がみられる園では、花芽に対して薬害の少ない薬剤を選定する。

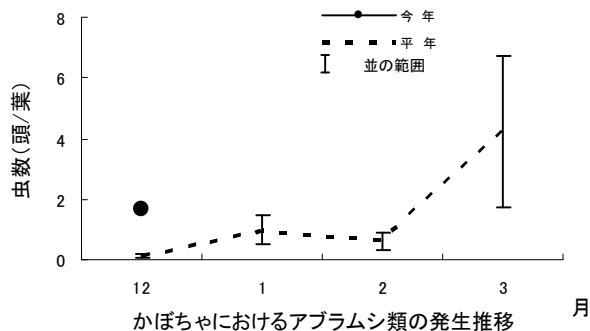
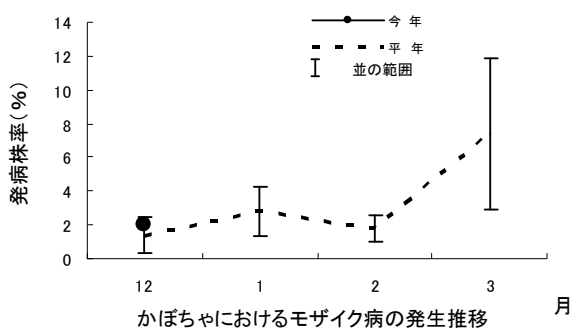
3 かぼちゃ

(1) モザイク病

発生程度 : やや多

予報の根拠

- 12月下旬の調査の結果、発病株率は2.0%(前年2.3%、平年1.4%)と平年並であった。
- 媒介虫であるアブラムシ類の葉当たり虫数は1.64頭(前年0頭、平年0.12頭)と平年より多く、有翅虫の割合が高かった。また、発生圃場率は100%であった。



<防除上注意すべき事項>

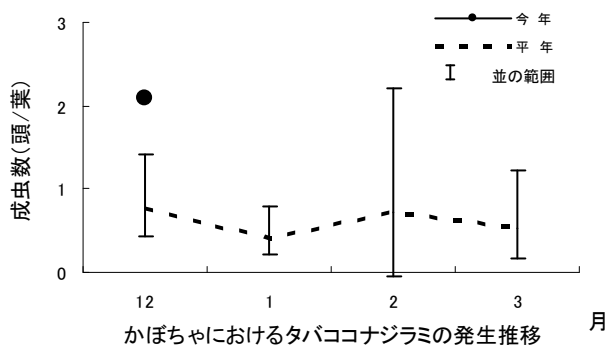
- 圃場周辺に防風対策を兼ねた防虫ネット等の資材を利用して有翅虫の飛来侵入を防ぐ。
- 圃場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除草を行う。
- 発病株は発生源となるので、見つけ次第抜き取りビニール袋に入れるなどして密閉処理し、圃場外へ持ち出し処分する。
- 本病は汁液伝染するので、ハサミや手の消毒、洗浄を行う。
- 収穫後の残渣は発生源となるので速やかに片づける。
- 平成23年度病害虫発生予察技術情報第8号(平成23年12月28日付)参照。

(2) タバココナジラミ

発生程度 : 多

予報の根拠

12月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は2.1頭(前年0.3頭、平年0.8頭)と平年より多かった。



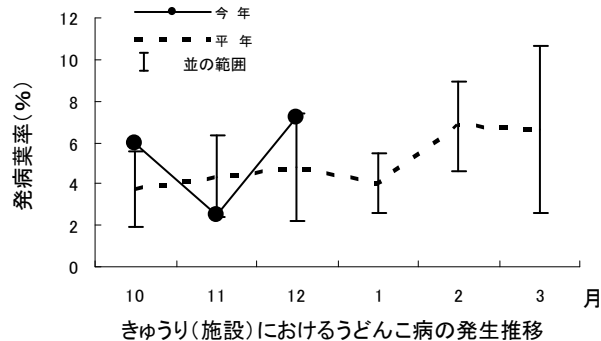
<防除上注意すべき事項>

- 圃場周辺の雑草は発生源になるので除草を行う。
- 本種は葉の白化を引き起こし、また、多発すると防除が困難になるので、葉裏を観察し早期防除に努める。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。また、薬剤抵抗性の発達しにくい気門封鎖剤や微生物農薬を使用する。

4 きゅうり(施設)

- (1) うどんこ病
 発生程度 : 並
 予報の根拠

12月下旬の調査の結果、発病葉率は7.2%(前年13.5%、平年8.1%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- 密植を避け、透光通風を良くする。
- 老葉や病葉は発生源となるので、圃場内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。
- 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。

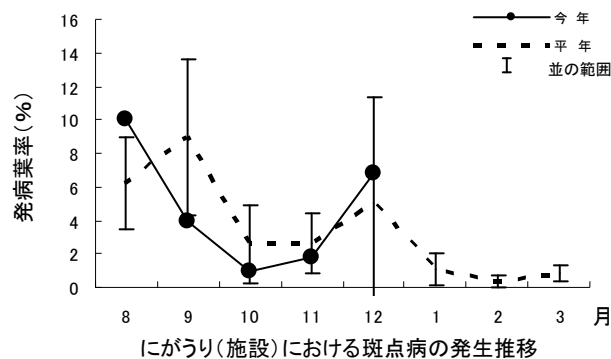
○ 黄化えそ病の防除対策

- 12月下旬の調査の結果、全圃場で発生がみられ、発病株率は11.6%であった。また、一部圃場で多発生がみられた。
- 着果前の発病株は、見つけ次第抜き取り処分する。
- 媒介虫であるミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。
- 施設内外の雑草は、ミナミキイロアザミウマの発生源となるので、除草に努める。
- ミナミキイロアザミウマは薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

5 にがうり(施設)

- (1) 斑点病
 発生程度 : 並
 予報の根拠

12月下旬の調査の結果、発病葉率は6.8%(平年5.0%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- 老葉や病葉は発生源になるので除去し、圃場外に持ち出して処分する。
- 過繁茂を避け、透光通風を良くする。
- 多湿にならないよう、施設内の換気に注意する。
- 葉をよく観察し、初期防除を徹底する。

6 トマト

○ トマト黄化葉巻病の防除対策

- a 12月下旬の調査の結果、本島南部の施設で本病の発生が確認された。また、一部の施設で多発生がみられた。
- b 発病株は感染源となるため、早急に抜き取る。抜き取った株は必ずビニール袋に入れるなどして密封し、圃場外へ持ち出し処分する。
- c 施設内外の野生生えトマトは、本病の感染源および媒介虫であるタバココナジラミの発生源となるので、抜き取り密封処分する。
- d 黄色粘着テープ等により、タバココナジラミの早期発見・早期防除に努める。
- e タバココナジラミの薬剤防除を行う場合は、マルハナバチに影響の少ない薬剤を選定する。

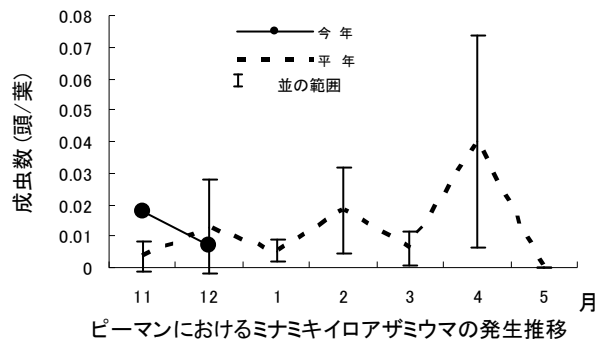
7 ピーマン

(1) ミナミキイロアザミウマ

発生程度 : 並

予報の根拠

12月中旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.01頭(前年0.03頭、平年0.01頭)と平年並であった。



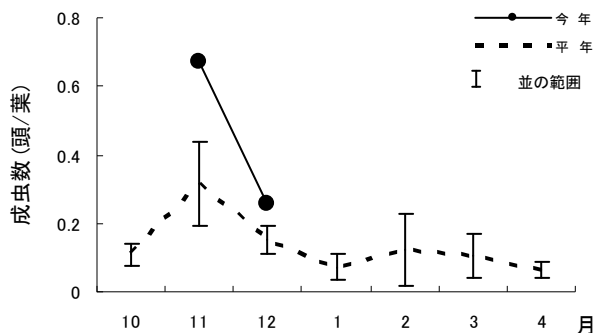
<防除上注意すべき事項>

- a 本種はウイルス病の媒介虫であるので、発生に注意する。
- b 施設の出入口には二重カーテンなどを設置し、本種の侵入を防ぐ。
- c 施設周辺の雑草は本種の発生源となるので、除草を行う。
- d 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。
- e 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

8 さやいんげん(平張り)

- (1) タバココナジラミ
発生程度 : やや多
予報の根拠

12月中旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.3頭(前年0.1頭、平年0.2頭)と平年よりやや多かった。



さやいんげん(平張り)におけるタバココナジラミの発生推移

<防除上注意すべき事項>

- 本種はさやの白化を引き起こすので、出入口の防虫ネットは二重にするなどして、施設内への飛来侵入を防止する。
- 摘葉等による残渣は、本種の発生源となるので、ビニール袋等に入れ圃場外へ持ち出し処分する。
- 黄色粘着板等を設置し、早期発見・早期防除に努める。
- 発生源となる周辺雑草の除去に努める。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

○ 菌核病の防除対策

- 12月下旬は曇天の日が多く、気象予報によると向こう1か月は平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想されており、本病の発生を助長すると考えられる。
- 発病部位は、菌核が形成される前に早めに除去し、ビニール袋に入れるなどして圃場外へ持ち出し処分する。
- 多湿時に発生しやすいので、老葉病葉は取り除き透光通風を良くする。
- 例年発生時期に当たるので、予防防除に努める。

9 小ぎく(彼岸出荷用)

○ 黒斑病、褐斑病の防除対策

- 12月の調査の結果、黒斑病、褐斑病の発生圃場率は27.8%、被害葉率は4.5%であった。また、一部圃場で多発生がみられた。
- 発病葉や摘葉等による残渣は、発生源となるため圃場の外に持ち出し処分する。
- 多発すると防除が困難となるため、発病初期の薬剤防除を徹底する。

○ 白さび病の防除対策

- 関係機関からの情報によると、12月下旬に自家苗(輪ぎく)栽培圃場で本病の発生が確認されている。
- 多湿条件下で発生するので、不要な下葉、脇芽は除去し、通風を良くする。
- 発病葉は除去し、ビニール袋に入れるなどして圃場外に持ち出し、焼却などの処分を行う。
- 発生時期には予防散布を行うとともに、葉をよく観察し初期発生を見逃さない。
- 防除効果を高めるため、薬剤耐性菌が発現しないようローテーション散布を行う。
- 栽培終了後は近隣圃場や次作の発生源にならないよう、不要な株は速やかに処分する。

○ アザミウマ類の防除対策

- 12月の調査の結果、アザミウマ類による葉の被害がみられ、被害圃場率は44.4%、被害茎率は4.7%であった。
- 圃場内外の雑草や収穫終了圃場の残渣は発生源となるので、早めに除去する。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。